

# 中学生・高校生の保育体験学習に関する一考察

## －幼稚園・保育所側から見た課題－

岡野雅子 生活科学教育講座

キーワード：保育体験学習，家庭科教育，中学生・高校生，幼稚園・保育所

### 1. 目的

わが国の出生率は低下の一途を辿り，平成 16 年の合計特殊出生率は 1.29 と過去最低値を示し<sup>1)</sup>，少子化はなお進行中である。また，児童虐待件数は近年急激に増加しているが，そのほとんどは親によるわが子に対する虐待である<sup>2)</sup>。

将来親となり子どもを育てることは，女子（母親）のみならず男女（父親と母親）がともに協力して行うことがらである。それは，たとえ結婚し親になるという生き方を選択しない場合でも，次世代を健全に育成することは市民としての責務の一つである。

この次世代を健全に育成するための資質は，近年「養護性」と呼ばれ<sup>3)</sup>，青年期に獲得すべき発達課題の一つとして重要視されている。幼い者に対するまなざしは，青年にとって，自らが親との関係における“いままで”の子どもの側の視点とは別の，養護する必要があるものとのかわりであり，“これから”の展望を含む新たな視点の形成を要請する。それは，それまで自明のことであった自らの被養護性の“いままで”に気づくことであるとともに，“これから”を展望したときに養護性を持たなければならないことに気づくことを促す。この自発的な発見による情意面の発達と，それに基づく養護性の獲得は，人間関係の希薄化が進行する現代社会に生きる青年たちにとって達成すべき重要な課題であるといえよう。

このような世代的連続性の視座に立つとき，幼い者に対する養護性を獲得することは，もう一方の異世代である高齢者に対する正しい理解を促すことにもつながり，広く他者理解を呼び起こすと思われる。

平成 10 年 12 月 14 日告示の『中学校学習指導要領』<sup>4)</sup> および平成 11 年 3 月 29 日告示の『高等学校学習指導要領』<sup>5)</sup> の家庭科の保育領域には，乳幼児や小学校低学年児童等とのふれあいや交流の機会を持つように努めることが明記された。戦後の学校教育において家庭科は保育教育を担ってきた実績を有しているが，近年の動向を受けて，幼稚園や保育所での保育体験学習はより一層活発に行われるようになってきている。また，保育体験学習が生徒に及ぼす教育効果を指摘した報告も多く提出されている。子どもに対する感情や態度，イメージが肯定的に変化したという報告<sup>6) 7) 8)</sup> や，中・高校生の対子ども社会的自己効力感を高めるという報告<sup>9)</sup> などがある。

その後，平成 12 年 4 月には中央教育審議会報告『少子化と教育について』が発表され，教育面から少子化に対応するための具体的方策の一つとして，学校教育における保育体験学習を一層充実することが提案された<sup>10)</sup>。

このように，保育体験学習に対する要請は高まってきているが，しかし，本格的な取り組みはまだ日が浅く，それゆえ，伊藤が指摘しているように，保育体験学習の教育効果は大きいことが報告されているものの，保育体験学習におけるどのような要因が中・高校生の子どもとの関係性に対する意識の変容をもたらし，それが結果として「子どもへの興味」や「子ども好き」に結びつくのかについて

は、未だ十分に解明されてはいない<sup>11)</sup>。したがって、保育体験学習に関してはなお検討すべきさまざまな課題があるものと思われる。

そこで、本報告では、保育体験学習の受け入れ側である幼稚園・保育所の保育の専門家から見た課題について検討することを試みた。それにより、保育体験学習をより実りあるものにするための示唆を得たいと考える。

## 2. 方法

(1) 調査対象者：群馬県 T 市および M 市にある幼稚園・保育所の園長（所長）または主任教諭（主任保育士）である。

(2) 手続き：幼稚園 48 園と保育所 79 か所に調査質問紙を郵送により（一部は直接訪問した）配布し、回答後に郵送により回収した。幼稚園 32 園（公 6、私 25、不明 1）と保育所 64 か所（公 30、私 34）の合計 96 園（所）より回収した（回収率は 75.6 %）。

(3) 調査時期：調査時期は平成 13 年 3 月である。

(4) 調査項目：調査項目は、①保育体験学習の受け入れの有無、②校種と保育体験学習の位置づけ、③保育体験学習の内容、④保育体験学習の時の生徒と幼児の様子、⑤保育体験学習の教育効果、⑥保育体験学習の問題点、⑦保育体験学習に適している時期、の 7 項目から成っている。

保育体験学習の内容は、「幼児と一緒に遊ぶ」「幼児の世話をする」「児童文化財を作る」「一緒に給食を食べる」「幼児を観察し記録する」「施設を見学する」「その他」を提示し、当てはまる項目について回答を求めた。

保育体験学習の時の生徒と幼児の様子は、「生徒は進んで幼児の中に入っていく、一緒に遊ぶことを楽しんでいた」「幼児は『お兄ちゃん』『お姉ちゃん』と喜んで一緒に遊んだ」の 2 項目について「たいへん楽しんでいた（喜んでいた）」から「全く楽しんでいなかった（喜んでいなかった）」までの 4 件法により回答を求めた。

保育体験学習の教育効果については、「生徒は子どもを好きになる」「保育の重要性を理解するようになる」「自分自身について考えるようになる」「親の役割についての理解が深まる」「子どもの発達についての理解が深まる」「地域交流について理解するようになる」の 6 項目について「全くそう思う」から「全く違う」までの 4 件法により尋ねた。

保育体験学習の問題点については、「生徒は幼児の扱いに戸惑いがある」「事前に体験学習の観点をしっかりと指導して欲しい」「校外実習のマナーをしっかりと指導して欲しい」「体験学習の回数をもっと増やして欲しい」「もっと組織的・計画的に行うことが必要だ」「体験学習の前後の生徒の意識や態度の変化を教師はよく見て欲しい」「生徒の遊び方は幼児の安全面で心配だ」「学校と園との協力体制を整える必要がある」「保育者の負担や日課の変更などの必要があり、迷惑だ」の 9 項目について「全くそう思う」から「全く違う」までの 4 件法で尋ねた。

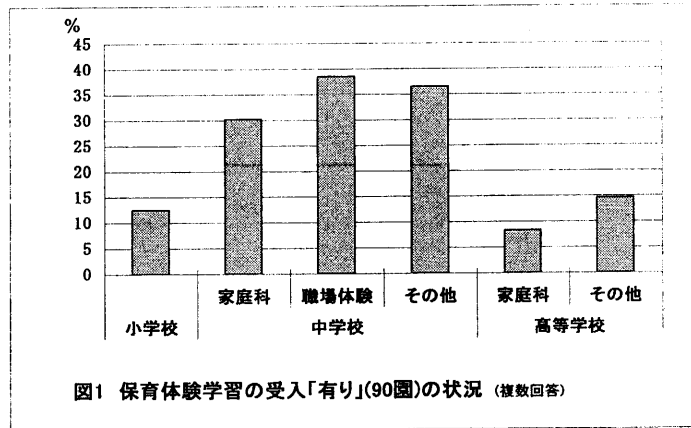
保育体験学習に適している時期については、小学生（高学年）、中学生、高校生、高校卒業後、その他を提示し、当てはまる項目について回答を求めた。

## 3. 結果と考察

### (1) 保育体験学習の受け入れ状況と学校種

保育体験学習を受け入れたことがある幼稚園・保育所は 96 園中 90 園で 93.8 % を占める。したがって、ほとんどの幼稚園・保育所には生徒が訪れているというのが実状である（図 1）。

校種別に見ると、小学生を受け入れたことのある園は 12.5 % と少なく、高学生は 22.9 % である。最も多いのは中学生で 92.7 % の園が受け入れており、これは受け入れた経験のある 90 園のうちの 89 園である。したがって、保育体験学習は受け入れ側から見ると中学生が中心であるといえる。

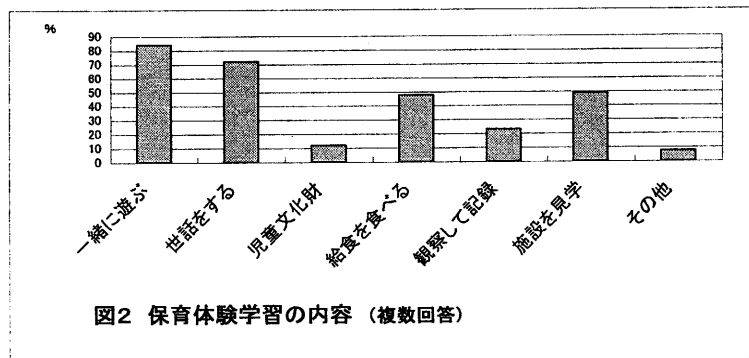


保育体験学習の位置づけは、「家庭科の授業として」は、中学生で 30.2 %、

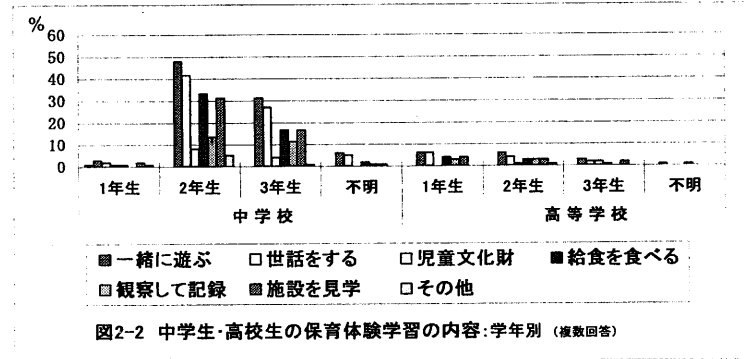
高学生で 8.3 % である。中学生の場合には「職場体験学習として」が 38.5 % あり、「家庭科の授業として」よりも多い。また、「分からない」(その他として分類)の回答も多く、中学生 36.5 %、高校生 14.6 % である。したがって、保育体験学習の受け入れ側としては、その位置づけについては必ずしも十分に把握している訳ではないといえよう。

(2) 保育体験学習の内容

保育体験実習の内容は「幼児と一緒に遊ぶ」が 84 % と最も多く、次いで「幼児の世話をする」72 % である。「一緒に給食を食べる」「施設を見学する」も約半数の園で行われている (図 2)。



保育体験学習の内容を校種別・学年別に見てもほとんど差は認められない (図 2-2)。したがって、生徒の発達段階にかかわらず受け入れ側としては同じような対応を行なっていて、「幼児と一緒に遊ぶ」「幼児の世話をする」などが一般的な内容であるといえる。

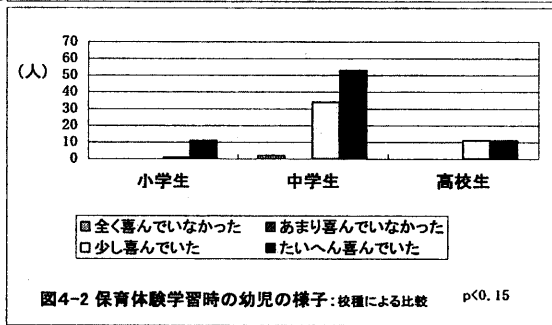
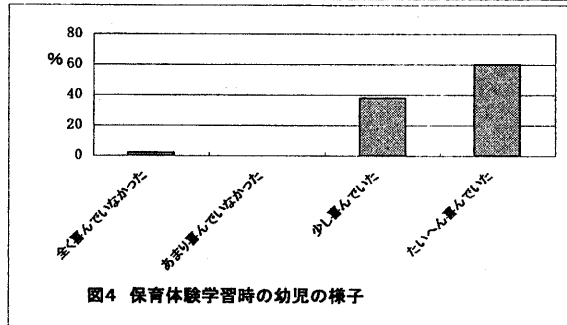
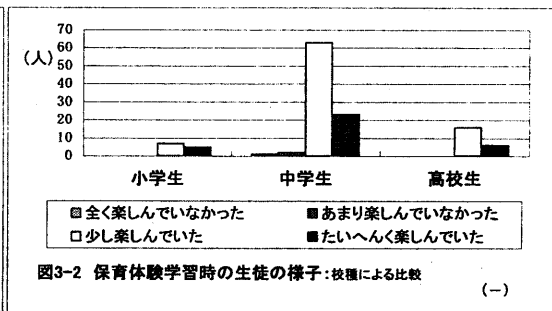
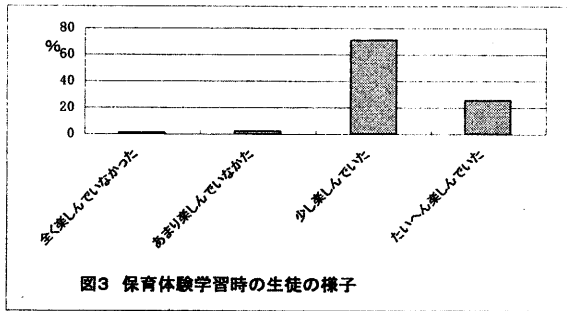


(3) 保育体験学習時の生徒の様子と幼児の様子

保育体験学習時の生徒の様子を受け入れ側から見た結果は、図 3 のようである。

「生徒は進んで幼児の中に入っていき、一緒に遊ぶことを楽しんでいた」に対して、「少し楽しんでいた」が 71 % で最多である。「たいへん楽しんでいた」と「少し楽しんでいた」を合わせると 96.7 % であり、校種による差は認められない (図 3-2)。

一方、保育体験学習時の幼児の様子は「たいへん喜んでいたら」が 60 % で「少し喜んでいたら」と合わせると 97.8 % が「喜んでいたら」と捉えている (図 4)。統計的有意差には至らないが (p<0.15)、高校生とのふれあいよりも中学生とのふれあいの方が、幼児は「たいへん喜んでいたら」の割合が多い傾



向があるようである (図4-2)。

保育体験学習について、生徒の様子 (図3) と幼児の様子 (図4) を比較すると、幼児の方が生徒よりも「喜んでいました」と保育者は捉えていることがわかる。

(4) 保育体験学習の教育効果

保育者 (受け入れ園) 側から見た教育効果についての回答は図5-1のようである。

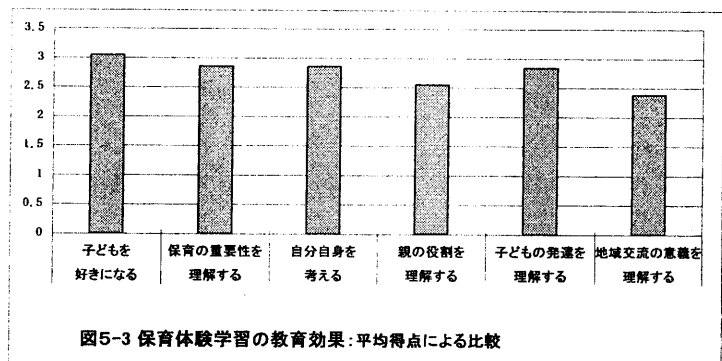
全体的に見ると、「少しそう思う」の回答が最多で6割～7割を占めている。しかし、「親の役割を理解する」については「全くそう思う」と回答した園は一つもなかった。「地域交流の意義を理解する」については「少し違う」の回答が一番多い。

校種別に見たものが図5-2である。いずれの項目にも校種による差は認められない。

「全くそう思う」を4点、「全く違う」を1点として得点化し、項目ごとの平均得点を比較したものが図5-3である。教育効果として「子どもを好きになる」の得点が最高で、次いで「子どもの発達を理解する」「保育の重要性を理解する」「自分自身を考える」と続く。「親の役割を理解する」は相対的に低い。

教育効果と生徒の様子との関連を見たものが図6である。「子どもを好きになる」「自分自身について考える」「親の役割を理解する」の3項目について、統計的有意差が認められた (p<.01)。

教育効果と幼児の様子との関連を見たものが図7であるが、図6と同様に「子どもを好きになる」「自分自身について考える」「親の役割を理解する」の3項目に統計的有意差が認められた (p<.01 ~.05)。



したがって、生徒が幼児とのかかわりを楽しんでいる場合ほど、また、幼児が生徒とのかかわりを喜んでいて場合ほど、「子どもを好きになる」「自分自身について考える」「親の役割を理解する」等の教育効果があがる、といえるようである。

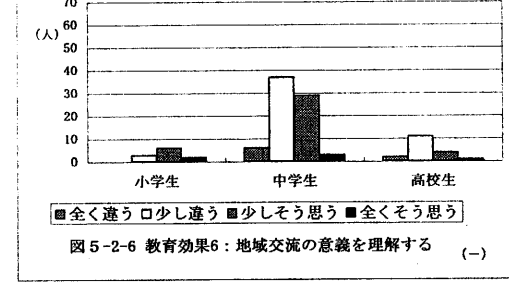
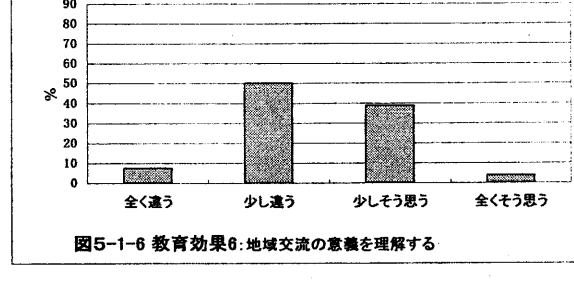
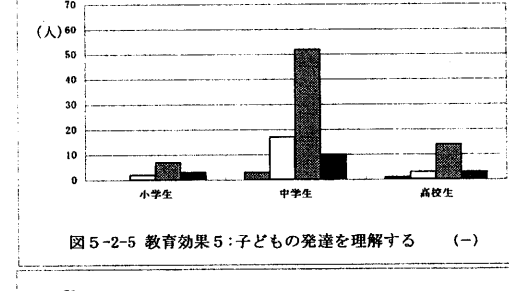
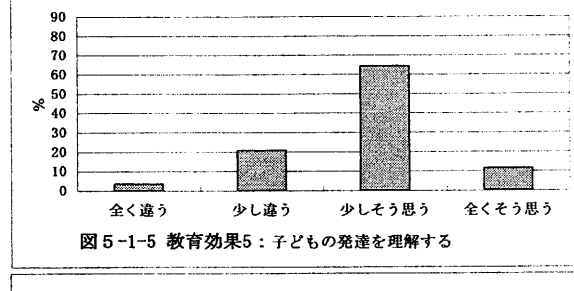
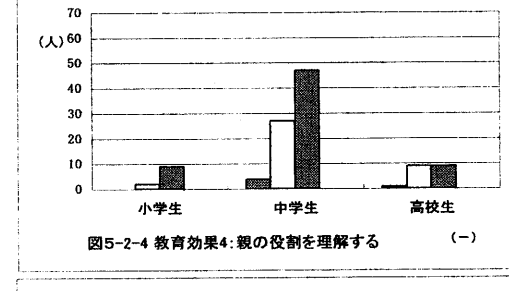
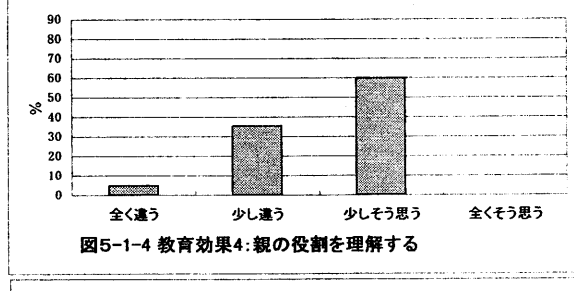
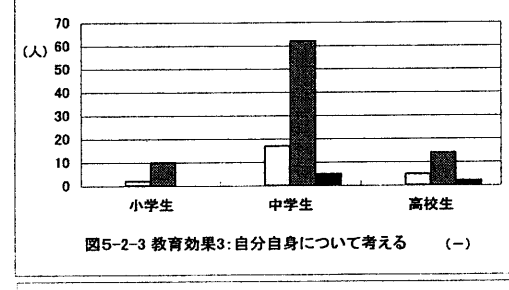
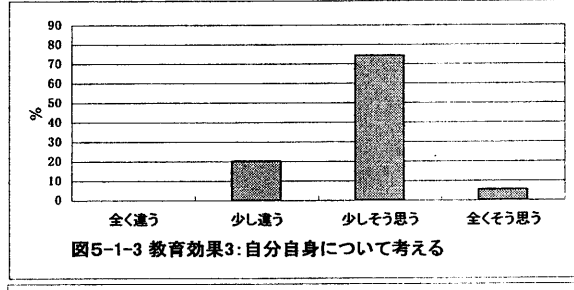
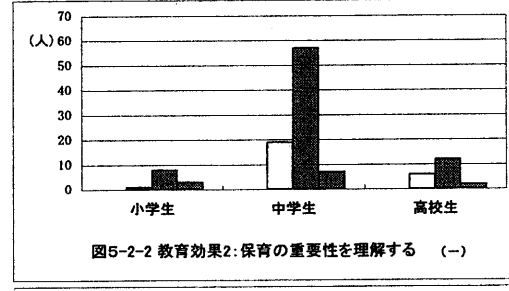
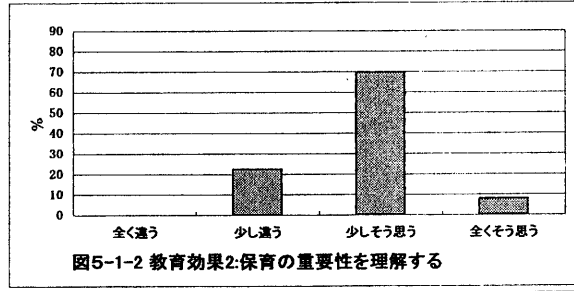
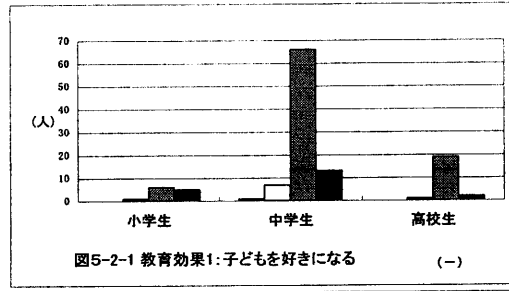
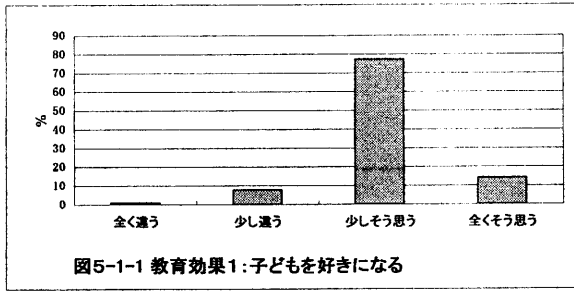


図5-1 保育体験学習の教育効果

図5-2 保育体験学習の教育効果:校種別

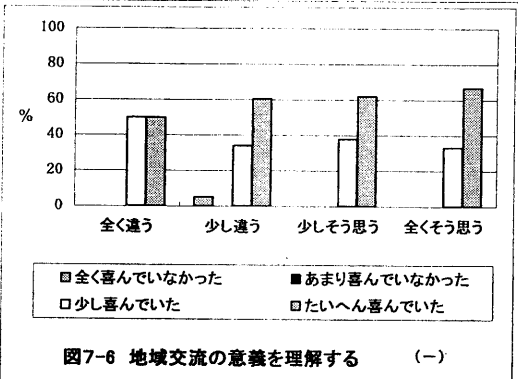
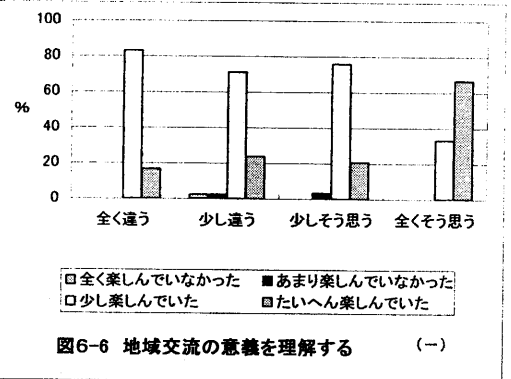
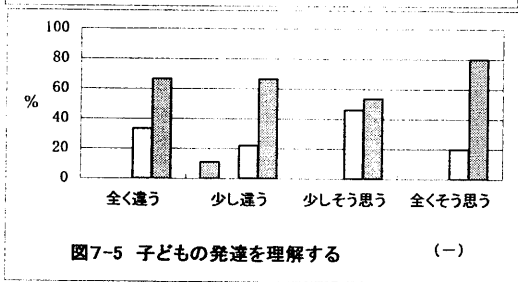
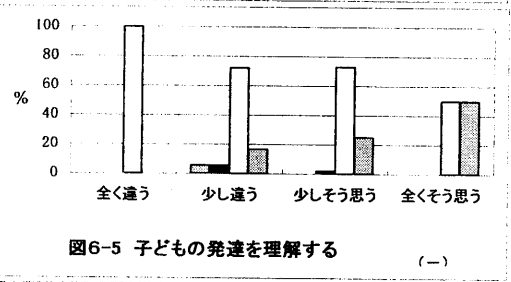
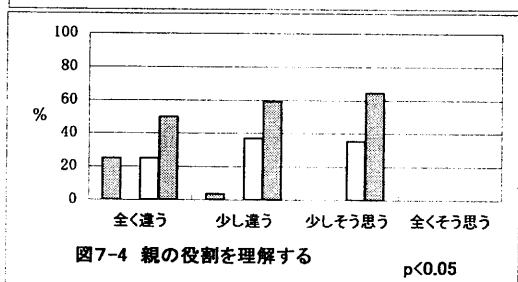
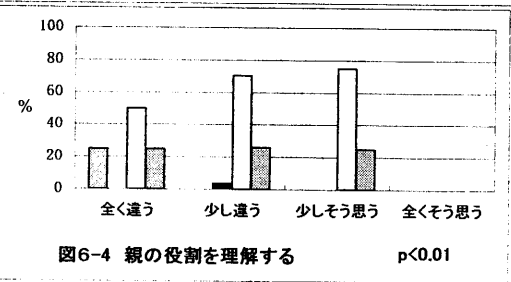
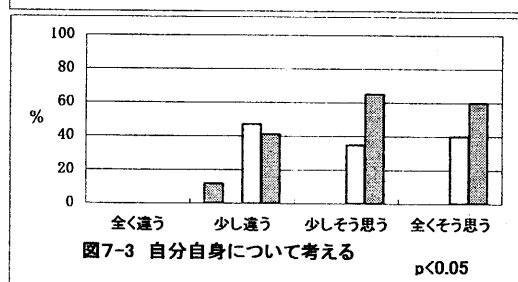
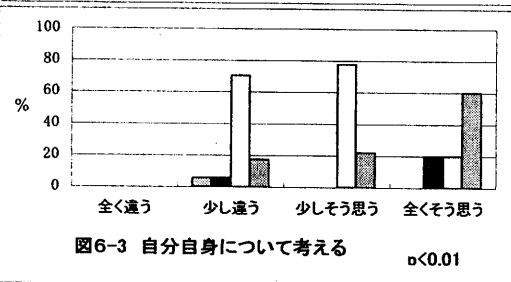
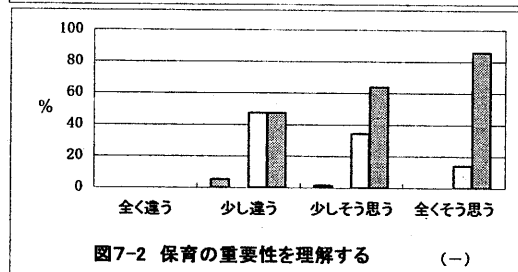
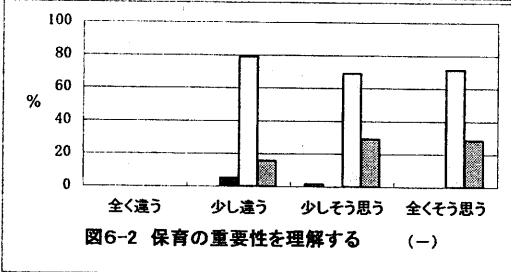
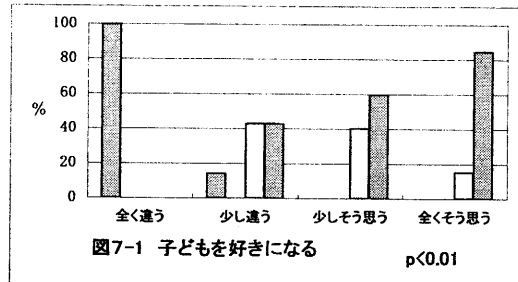
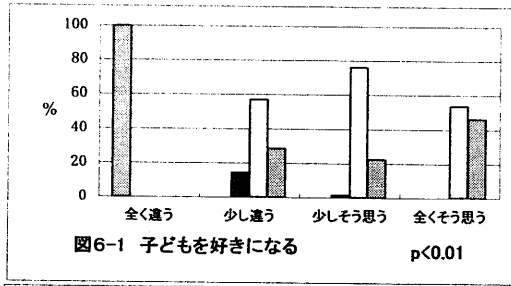


図6 保育体験学習の教育効果と生徒は楽しんでいたの関係

図7 保育体験学習の教育効果と幼児は喜んでいたので関係

(5) 保育体験学習の問題点

次に、幼稚園・保育所側から見た問題点について見てみたい。

9項目に対する回答は、項目によるバラツキが認められた(図8-1)。「全くそう思う」と「少しそう思う」を合わせると、「事前に体験学習の観点を指導して欲しい」が82.8%と最も多く、次いで「学校と園との協力体制を整える必要がある」「生徒は幼児の扱いに戸惑いがある」「体験学習の前後の生徒の意識や態度の変化をよく見て欲しい」「マナーをしっかりと指導して欲しい」「もっと組織的・計画的に行うことが必要だ」の項目が6割を超えている。「生徒の遊び方は幼児の安全面で心配だ」は半数、「回数をもっと増やして欲しい」は3割弱であり、受け入れ側は回数を増やすことに対しては消極的であるといえる。しかし、保育体験学習は「迷惑だ」の回答は14%と僅かであり、決して拒否的ではないことがうかがえる。

校種別に見たものが図8-2であるが、いずれの項目にも校種による差は認められない。

平均得点を比較すると、「観点を指導して欲しい」が最高で、「マナーを指導して欲しい」「協力体制を整える必要がある」「生徒の変化を見て欲しい」「生徒は幼児の扱いに戸惑いがある」「組織的計画的に行うことが必要だ」と続いている(図8-3)。これらの結果から、保育体験学習に対して十分な事前指導を行うこと、および、保育体験学習による生徒の変化について教師が正確に理解することを受け入れ側は求めているといえよう。

保育体験学習の問題点と生徒の様子との関連をみたものが図9である。統計的有意差を示す項目は見いだせないが、「幼児の扱いに戸惑いがある」「事前に観点を指導して欲しい」の2項目は、生徒が幼児とのかかわりを楽しんでいない場合ほど得点が高い傾向が認められる( $p < .1$ )。

保育体験学習の問題点と幼児の様子との関連をみたものが図10である。幼児が生徒とのかかわりを喜んでいないことと「生徒は幼児の扱いに戸惑いがある」との関連に統計的有意差が認められた( $p < .05$ )。

(6) 保育体験学習の適時

受け入れ側から見た時に保育体験学習に適していると考える時期は「中学生」の回答が76%と最も多く、ついで「高校生」の44%である(図11)。受け入れ校種別に見たものと比べると、小学生や高校生を受け入れたことのある園でも保育体験学習の適時は中学生期であるという回答が多い(図11-2)。

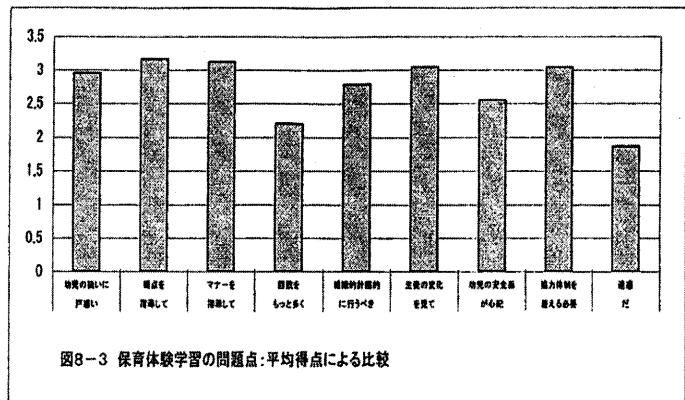


図8-3 保育体験学習の問題点:平均得点による比較

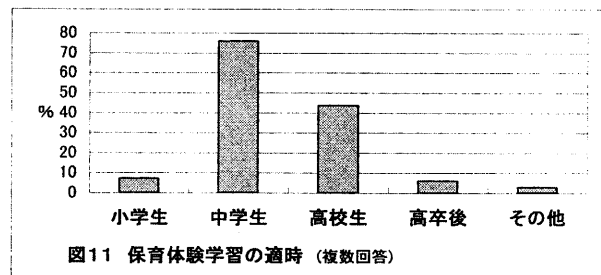


図11 保育体験学習の適時 (複数回答)

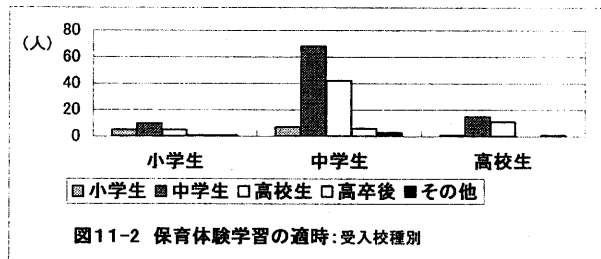


図11-2 保育体験学習の適時:受入校種別

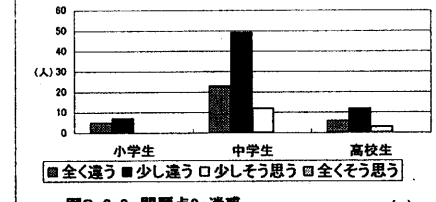
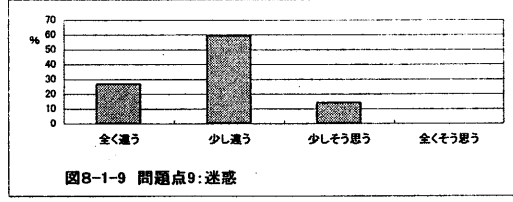
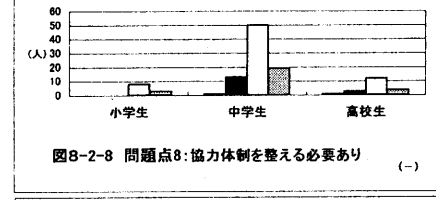
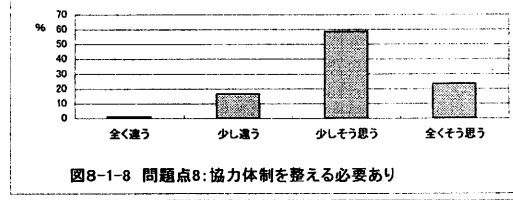
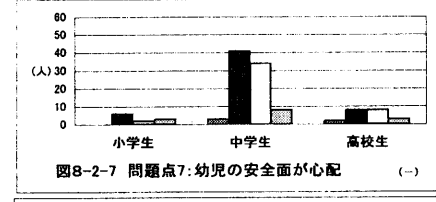
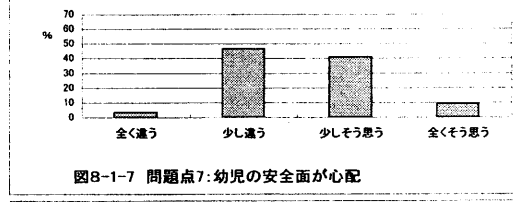
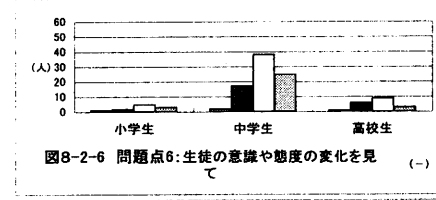
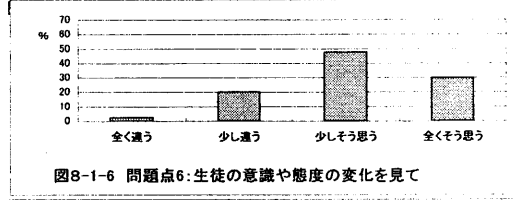
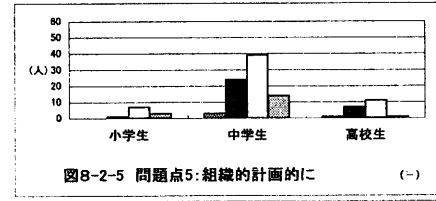
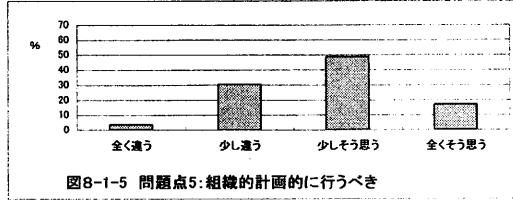
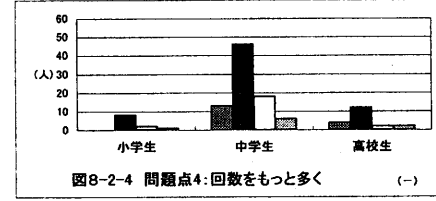
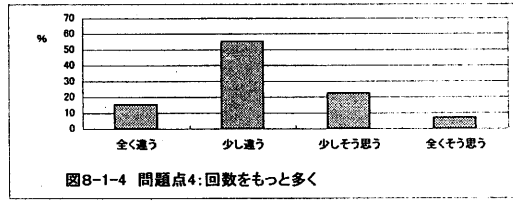
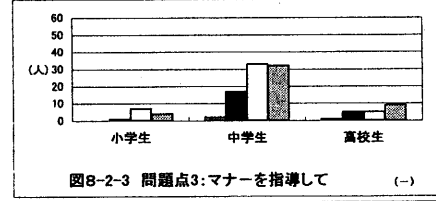
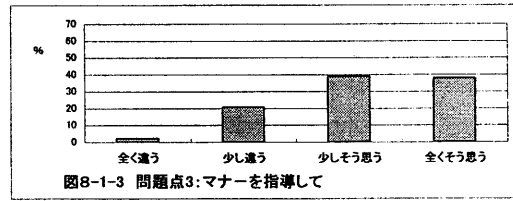
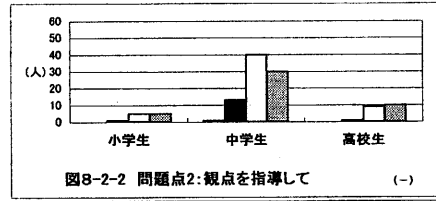
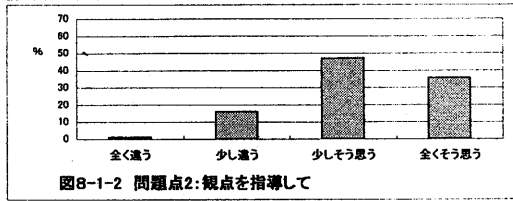
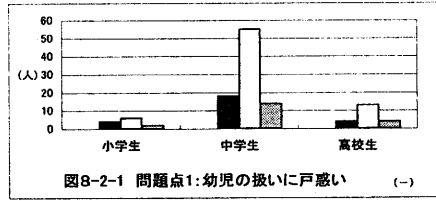
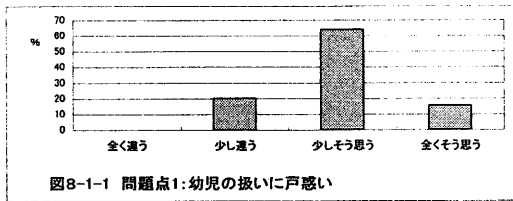


図8-1 保育体験学習の問題点

図8-2 保育体験学習の問題点: 校種別



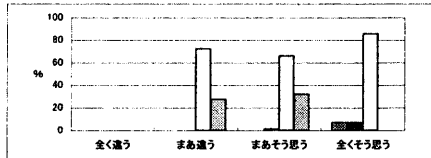


図9-1 幼児の扱いに戸惑い (p<0.1)

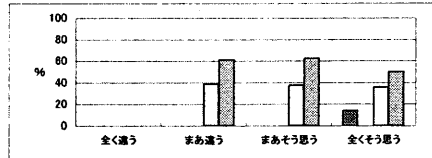


図10-1 幼児の扱いに戸惑い p<0.05

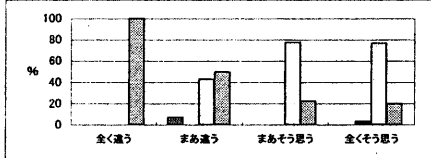


図9-2 観点を指導して (p<0.1)

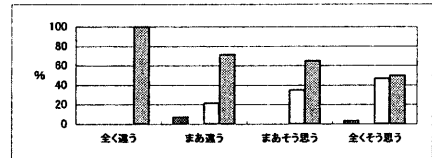


図10-2 観点を指導して (-)

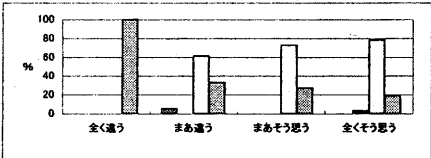


図9-3 マナーを指導して (-)

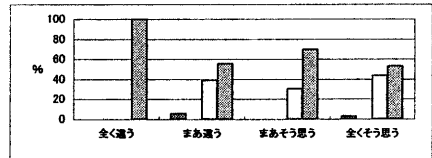


図10-3 マナーを指導して (-)

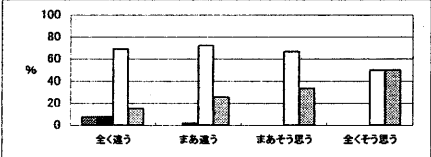


図9-4 回数をもっと多く (-)

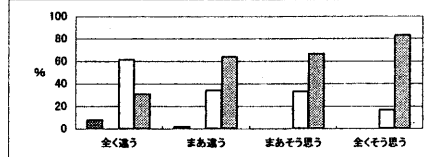


図10-4 回数をもっと多く (-)

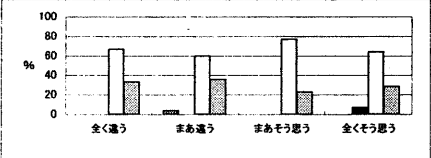


図9-5 組織的計画的に行うべき (-)

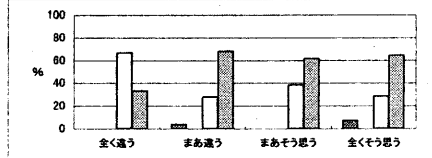


図10-5 組織的計画的に行うべき (-)

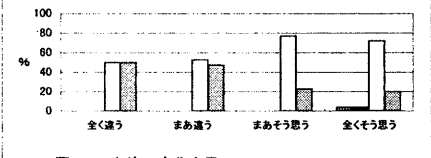


図9-6 生徒の変化を見て (-)

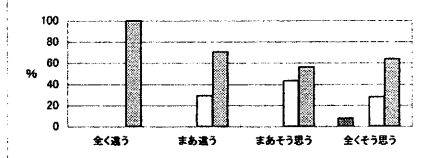


図10-6 生徒の変化を見て (-)

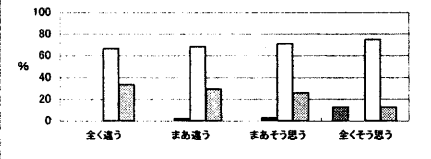


図9-7 幼児の安全面が心配 (-)

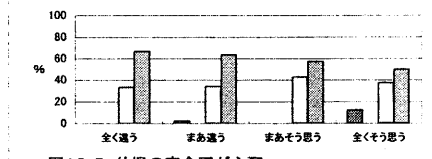


図10-7 幼児の安全面が心配 (-)

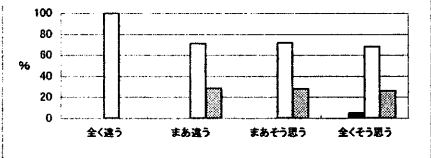


図9-8 協力体制を整える必要あり (-)

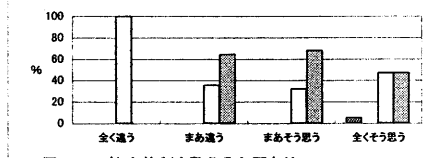


図10-8 協力体制を整える必要あり (-)

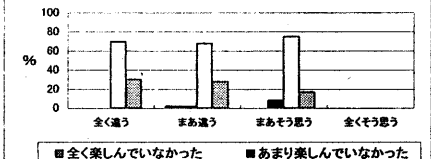


図9-9 迷惑 (-)

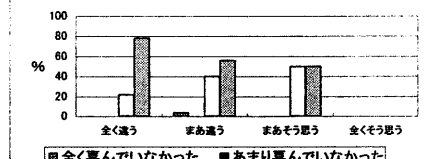


図10-9 迷惑 (-)

図9 保育体験学習の問題点と生徒は楽しんでいたの関係

図10 保育体験学習の問題点と幼児は喜んでいたので関係

## (7) 考察

保育体験学習を受け入れた幼稚園・保育所は93.8% (96箇所中の90箇所) にのぼり、ほとんどの園(所)が受け入れているという現状が改めて明らかとなった。ただし、本調査の回収率が100%ではないことから、未回収分の中には受け入れたことがない幼稚園・保育所が含まれていることは推測される。それを考慮に入れてもなお、今日では多くの幼稚園・保育所が、生徒の保育体験学習の「場」となっていることが確認された。したがって、幼稚園や保育所という、第一義的にそこで日々生活し学習し発達する乳幼児にとっての社会的機関が、生徒の学習の場として一般化しているといえる。このことは、保育体験学習を行う側である中学生・高校生についての教育効果を検討するのみならず、もう一方の当事者である幼児にとっても保育体験学習が大きな影響を及ぼすものであることから、幼児の側についても視点に入れた保育体験学習のより良いあり方を検討していく必要があることが改めて認識される。

校種別では中学生を受け入れたことがある園は92.7%であるが、小学生(12.5%)や高校生(22.9%)は相対的に少ないことも明らかとなった。岡野らは、長野県の全高校家庭科教員を対象として保育領域の現状について調査を行っているが、58%の教員が今までに保育体験学習を行ったことがあると回答した。そして、「生徒は積極的に取り組んだ」(96%)「教育効果は大きい」(92%)と捉えているが、しかし一方では、「準備が大変だ」(83%)とも回答していた。これらの結果から、岡野らは、保育体験学習をより効果的に実施し充実を図るための方略について、今後検討することの必要性を指摘している<sup>12)</sup>。

また、幼児と直接ふれあうことが「子どもを好きになる」という教育効果をもつことは、生徒自身による自己評価や感想文などによる先行研究で既に報告されているが、受け入れ側の保育者から見たときにもそれは認められるところであることが今回の調査結果からも明らかとなった。

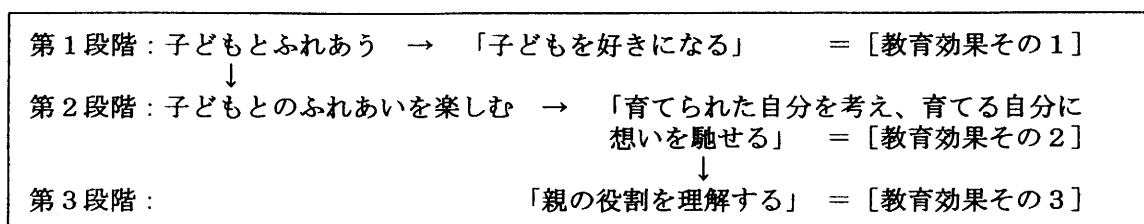
その一方で、受け入れ側からは、現状の保育体験学習について「事前に観点をしっかりと指導すること」や「保育体験学習を通して生徒がどのように変化したかについて、教師がしっかりと把握してほしい」などが、課題として指摘された。

ところで、中央教育審議会報告『少子化と教育』<sup>13)</sup>では、「子育て理解教育」という新たな視点を提案し、その視点に立って保育体験学習の重要性が指摘されているが、今回の結果からは、「親の役割を理解する」の項目については、保育者側から見たときにその効果は相対的に充分であるとはいえないようである。

保育体験学習の特徴は、本来、人と人との直接的な相互作用を行うことにあるといえるが、ここで注目されることは、「親の役割を理解する」の項目は、「生徒は幼児とのふれあいを楽しんでいる」「幼児は生徒とのふれあいを喜んでいる」と関連が認められたことである。この結果から次のことが示唆される。すなわち、生徒が幼稚園・保育所を訪ねて幼児と一緒に遊んだり、幼児の世話をしたりすることによって、子どもを身近に感じ、「子どもを好きになる」という教育効果をもたらすが、しかし、それだけで良しとするのではなく、次のステップとして、「子どもとのかかわりを楽しむ」という段階に進むと、生徒は「育てられてきた自分」について考え、将来の「育てる自分」を想像することになる、ということを示唆していると思われる。そのようなプロセスを経て、改めて「親の役割を理解する」に至る、と考えられるのではないだろうか。図12はその構造を示したものである。

したがって、本研究結果から、保育体験学習の持つ教育効果は階層的な段階があることが示唆されたといえるだろう。しかし、その検証にはさらに精査が必要であると考えられる。今後の課題としたい。

図 12 保育体験学習の教育効果の段階的構造



金田は、育てられている時代（小学生、中学生、高校生）に育てることを学ぶことの意義を指摘している<sup>14)</sup>。また、倉持らは家庭科教員研修の側面から保育学習について検討し、保育体験学習に取り組む教師は、授業場面以外でも体験学習の場へ出かけて行き、幼児の生活実態を把握し保育者の役割を理解することの必要性を指摘している<sup>15)</sup>。また、岡野は、大学生の乳幼児とのふれ合い体験（2回実施）について、学生自身による省察資料を基にして考察を行っている。1回目資料には乳幼児を目の前にしたときの困惑や素朴な驚き、そして楽しさが記述されており、子どもについてもっと知りたいという動機づけが生じていた。3ヶ月後に行った2回目の資料からは、子どもの目線で周囲を見ることの重要性に気づくとともに、子どもの行動をそれまでに学んだ知識と照合することにより、学生の子どもに対する理解が深まっていることが読み取れた<sup>16)</sup>。このように保育体験学習にはさまざまな角度からの接近が必要であり、なお一層の取り組みが求められよう。

わが国では平成12年5月に児童虐待防止法が超党派の議員立法で成立し、同年11月から施行されている。しかし、児童相談所への虐待相談件数は厚生労働省が統計を取り始めた平成2年度以降、増加を続けており、平成16年度は33,408件で、平成2年度の30倍に達しているという。そして、虐待者は実父21%、実母63%（平成15年度）である<sup>17)</sup>。言うまでもなく、児童虐待という行為は養護性とは正反対の極に位置するものであり、被虐待児のその後の人間形成への多大な弊害を想うとき、養護性獲得の課題は人間の発達過程における必須事項の一つとして認識される。わが国の次代を担う人材が健全に育つための方略の基本には養護性獲得の課題があり、保育教育は国民すべてにとっての基本的な教育であるといえるだろう。

#### 文献

- 1) 厚生労働省. 平成16年人口動態統計月報年計(概数)の概況, 2005
- 2) 読売新聞. 全国の児童相談所での児童虐待相談件数の推移, 平成17年12月1日記事
- 3) 小嶋秀夫. 養護性の発達とその意味, 小嶋秀夫(編)乳幼児の社会的世界, 有斐閣, p.187-204, 1989
- 4) 文部省. 中学校学習指導要領, p.86, 平成10年12月
- 5) 文部省. 高等学校学習指導要領, p.136, 平成11年3月
- 6) 室雅子. 中学・高校での乳幼児接触体験と保育教育の果たす役割, 家庭教育研究所紀要, 21, pp.75-85, 1999
- 7) 藤後悦子. 高校の「保育」体験学習を通じての子どもイメージの変化, 家庭教育研究所紀要, 23, pp.108-118, 2001
- 8) 中嶋明子, 砂上史子, 日景弥生, 盛玲子. 高校家庭科における保育体験学習者の意識変容(第1報), 日本家庭科教育学会誌, 46(4), pp.351-361, 2004
- 9) 伊藤葉子. 中・高校生の保育体験学習の教育的効果, 乳幼児教育学研究, 13, pp.1-12, 2004
- 10) 文部省. 中央教育審議会報告「少子化と教育について」, 平成12年4月
- 11) 前掲9)
- 12) 岡野雅子, 宮澤愛, 赤塚みのり. 高等学校家庭科「保育領域」についての現状と課題, 信州大学教育学部紀要, 114, pp.13-24,

2005

13)前掲 10)

14)金田利子編著. 育てられている時代に育てることを学ぶ, 新読書社(東京), 2003

15)倉持清美, 無藤隆. 保育学習における中学校家庭科教員研修の効果, 日本家政学会誌, 54(4), pp.317-326, 2003

16)岡野雅子. 乳幼児とのふれ合い体験についての一考察—大学生の省察資料による検討—, 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』, 6, pp.1-10, 2005

17)前掲 2)

(2005年12月14日 受理)